

課題解決の視野を広げる 12 のキーワード

<第3部>

12のキーワード

を使って

課題を解く

第1部に続いて、こちらでは8つの課題について、12のキーワードを使って解決策を探ってみます。これらはあくまで私の個人的な案です。これを参考に、自身で課題を設定し、その解決策を考えて、空欄に記入してください。

住民流福祉総合研究所

木原孝久

第2部

キーワードを使って課題を解く

<目次>

作業の留意点／3

事例(1)「児童虐待」の課題を解く／6

事例(2)「いじめ」の課題を解く／12

事例(3)「ひきこもり」の課題を解く／18

事例(4)「認知症」の課題を解く／24

事例(5)「一人暮らし高齢者」の課題を解く／30

事例(6)「家庭介護」の課題を解く／38

事例(7)「ゴミ屋敷」の課題を解く／43

事例(8)「デイサービス」の課題を解く／49

作業の留意点

(1)自分で考えたキーワードも使いたい場合は、それを加えることもできる。提示されているキーワード群と入れ替えてもいい。

(2)勉強のため、12の空欄すべてを埋めるつもりで取り組んでみてほしい。意外な良策が見つかるかもしれない。

(3)キーワードの中には、自分には使いにくいと思うものもあるはずだ。その場合、あらためてキーワードの解説を読み直していただきたい。1つのキーワードには、1つのヒントしかない、というわけではない。いくつかの意味が含まれているので、その中から自分に合った意味を探し出すのも、1つの方法だ。

(4)提示された12のキーワードを使いこなすために、ヒントの解説を熟読していただきたい。この12のキーワードをきちんと読んでいただければ、1冊の福祉読本を読破したこともなる。

(5)空欄を埋めている間に、「これだ！」と閃くことがあるはずだ。このテーマの重要ポイントが見えてきたと考えていただきたい。例えば本書の例では、「いじめ」についてポイントになるのは「子ども発」であり、主たる担い手は「上級生」、もう1人は「いじめっ子」なのではないか、というように。

(6)前項の「ひらめき」は、裏返すと、現行の取り組みの盲点のようなものが見えてきたということかもしれない。

(7)仲間とワイワイガヤガヤ議論しながらやると、アイデアがたくさん出てくる。半分面白がってやるのがコツだ。面白いひらめきは、常識にとられないやり取りから生まれてくる。だから、「こんなふざけたことを言っているのか？」などと悩む必要はない。テーマによって、これは自分の専門外だから言いにくいなどと遠慮する必要もない。アイデアを出すということは、専門外の人が無責任な発案もまたそれなりに価値があるものなのだ。

(8)案を出したが、そんなことが実際にできるものなのかと思うものも少なくないはずである。そう言われれば、この欄で出てくる案の多くはそういう類いのものだと言っていい。つまりあなたが出した案は、これから具体的にはどう取り組めば実現可能になるのか、それを出すための素案だと思えばいいのだ。

(9)この作業を、いろいろな場面で行ってみるといい。例えば、

①福祉ワーカーの集まりや研修会でグループ討議として取り組み、結果を発表し合う。

②自分の職場で、これから取り組む企画が出てきたら、その部署のメンバーで、12のキーワードにのせてみる。

③リーダー級の住民向けのセミナーでこれを使い、いい案が出てきた人に、社協などで企画立案の役を果たしてもらうという手も。

④この方式でいろいろな福祉活動の企画を立案し、関係機関や当該グル

ープに提示していく専門のグループができてもいい。

⑤施設の利用者や、当事者グループ、老人クラブのメンバーなどで、「私は考えること、アイデアを出すことが得意」という人たちに取り組んでもらってもいい。

⑥介護保険関連の協議会や、地区社会福祉協議会、まちづくり協議会、町内会、民生委員などでも、事業・活動企画を立案するのに使える。

(10)冒頭にも触れたとおり、本書を参考にして、自分の部署や組織にふさわしいキーワードを新たにつくり出すという手もある。頭は使うが、それだけ勉強になるし、自分たちが考えだしたキーワードだから、使いやすい。

以上、①から⑥のどれかに取り組まれたときは、ぜひご一報いただきたい。

事例(1)「児童虐待」の課題を解く

■このテーマで特に注目すべきキーワード

①本人発

子どもに助けられ上手教育を。身の安全を守るための自立教育も。

②一人ひとり

親子が一体という考えを取り払う。子どものいのちを守るために親と対決も。

③日陰に光を

虐待する父親の救済という視点も。彼のライフワークを支援することも。

④アマチュア

専門家でないと駄目という考えを変えさせる。世話焼きさんの登用を。

⑤さかのぼる

父親がその父に虐待された時点まで遡り、その事実を考慮した継続的な関わりを。

⑥権力の抑止

虐待家庭に強制的に介入、あるいはご近所が連携して監視の目を光らせる。

(1)子どもに助けられ上手教育

児童に対する助けられ上手教育は絶対に必要だ。それに加えて、助け合いのグループのつくり方や、家庭内で問題が起きた場合の対応の仕方、暴力を振るわれたときにどこに連絡したらいいか、SOSの発信の仕方なども教える。

(2)父親の問題行動が深刻化する前に関わっていく

家庭内暴力の加害者の多くが、自身、子どもの頃に虐待を受けていたことが分か

っている。そこで、特に父親自身が虐待を受けた経験がある場合、粗暴などの問題行動が軽微なうちから関わっていくことで、深刻な事態を防げる可能性がある。

(3)子どもを保護するために「寄り添い人」をつける

できる限り本人に寄り添い、父親の暴力から守る人。児童や両親からも信頼されている人物がいればベスト。ご近所の世話焼きさんで、対象の家に既に入出入りしている人など。

(4)子どもを守るご近所づくり

子どもの被害を住民が把握しやすいのが、ご近所である。ここなら怒鳴り声や悲鳴も聞こえる。住民の中には世話焼きさんも混じっているし、子どもが駆け込めるのもご近所だ。そこで、被害を受けている児童を守れるようなご近所を住民たちでつくっていかねばならない。お節介さん、こじあけ屋さん、受け入れ屋さん（駆け込みたくなる家）など、いろいろな世話焼きさんを総動員しよう。

(5)父親のライフワークを支援

父親自身のストレスが暴力の一因になっている場合、彼の生きがいに取り付くのも1つの方法になる。本人の生きがい（ライフワーク）を支援していくことで、問題行動が弱まることも考えられる。

(6)被害児童の駆け込み寺づくり

子ども110番の家があるが、ほとんど形式的なものになって機能していない。子どもが自分たちで選んでいく必要がある。被害児童が駆け込みやすいのが必須の要件。それらの家や店でネットワークを作り、何か起きたときは連携して対応する。一泊できる家、しばらくの間泊まれる家など。

(7)被害児童による自助活動

何らかの形で、被害を受けた児童同士で助け合う機会をつくれないか。

(8)父親と母親の救済を一体で

両者を区分けせず、一体的に支援していく。祖父母がいれば、彼らも含めた包括的な支援を行う。

(9)その家族の豊かな生活づくりを支援

視点を変えて、ただ暴力の問題だけに取り組むのではなく、その一家が困っていること、抱えている問題があればその解決を手助けしたり、彼らの豊かな生活づくりで不足しているものを見つけ、それを支援していく。

(10)児童相談所にスタッフとして地域の世話焼きさんを登用

驚くべきことに、児相のスタッフが、役所からの出向制になっている。それで子どもの問題への関心や知識、虐待の疑いのある家庭に上手に関わっていく資質のあるスタッフが確保できるのか。そういうことならば、地域の世話焼きさんを登用する方がどれほど効果的であるか。

(11)児童相談所が生協に問題家庭の訪問を委嘱

すでに暴力が始まっている家庭に対して、公私いずれかの介入が必要になる。公的機関よりも、民間組織が適当な場合もある。児相が把握した危険家庭に対して、生協の幹部たちが2人で訪問活動をする取り組みが成功している。イギリスのように、ファミリーワーカーが半強制的に関わっていく方式もある。

(12)被虐待児童に継続的に関わる

虐待を受けた子どもは、深刻な心の傷を負っている。問題が解決したから終わりということではなく、その子が大人になるまで継続して関わり、必要に応じて心のケアなどをしていく必要がある。

(13)家庭内の権力構造の変化に応じてご近所で抑止体制

心配な家庭の権力構造の変化（例えば母親が家を出ていった、病気になったなど）を見て、ご近所で緊密に見守る体制をつくっていくとともに、父親の加害行動を抑止する対策を考える。昔のような長屋的なご近所ができていれば、それが抑止力になる。又は家庭内部の両親や兄弟親戚などの存在も大事になる。助け合いのご近所づくり。

(14)危険家庭への強制介入

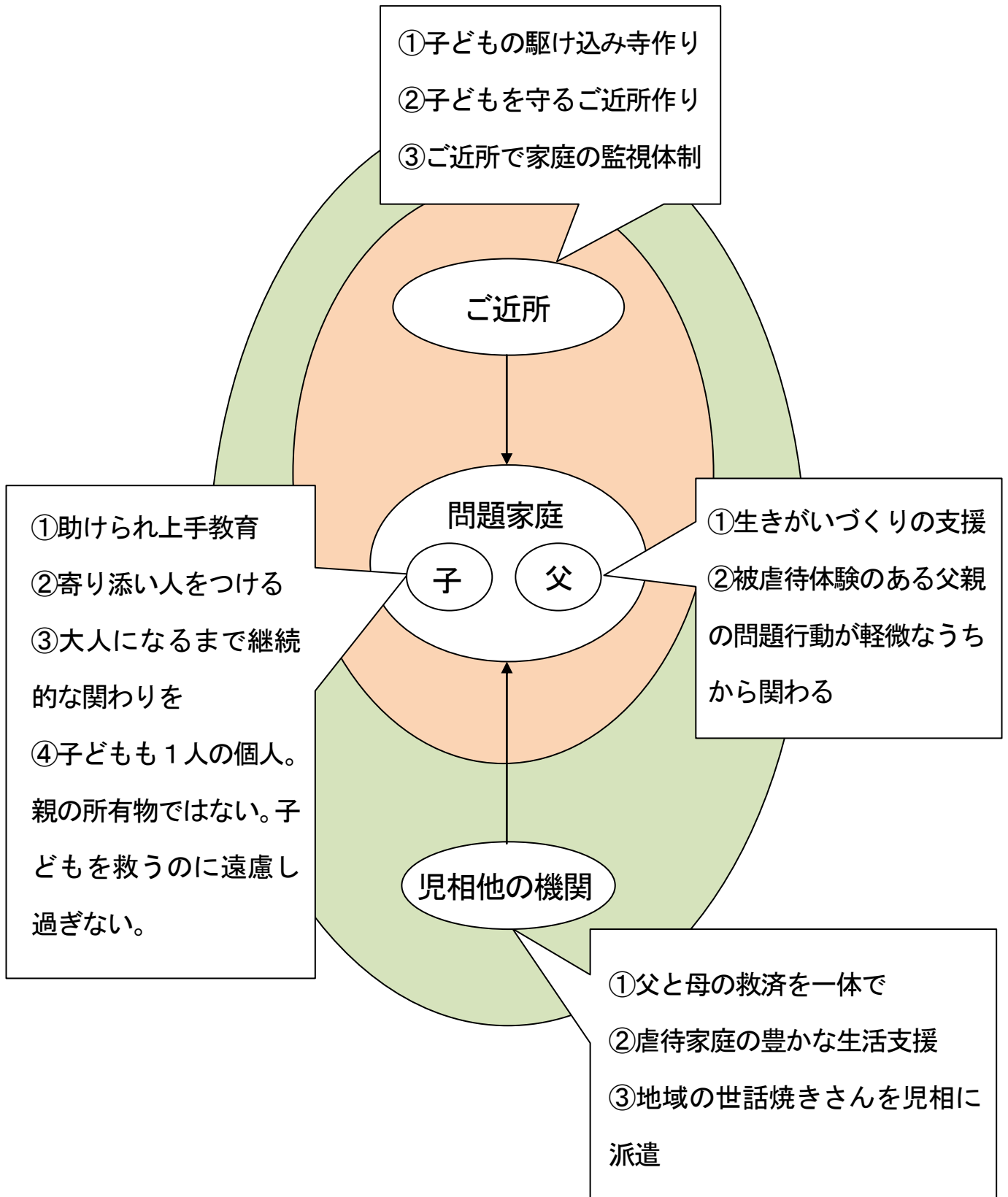
名古屋市の児童相談所では、元警察官などに委嘱して、虐待の疑いのある家庭を訪問し、虐待が行われていたことが分かれば強制的に連れ出している。

(15)子どもも1人の個人。その子の親に遠慮しすぎもおかしい

子どもの泣き声が聞こえていたのに、ご近所のだれも動かなかった—という場合、住民が行動を起こせない最大の理由は、親をさし置いて、しゃしゃり出るのはどうかという遠慮だろう。しかし子どもと親は一心同体ではない。子どもには1人の個人として尊ばれる権利がある。

1	本人発	子どもに助けられ上手教育を
2	一人ひとり	子どもを保護する「寄り添い人」 子どもは1人の個人。親の所有物ではない
3	フェアネス	
4	スロー	子どもを守るご近所づくり
5	日陰に光を	父親の生きがい（ライフワーク）を支援
6	森羅万象	被害児童の駆け込み寺作り
7	ポジティブ	
8	全体を見る	父親と母親の救済を一体で 虐待家庭の豊かな生活づくりを支援
9	アマチュア	児童相談所にスタッフとして地域の世話焼きさんを 登用
10	ひらく	児童相談所が生協に問題家庭の訪問を委嘱 家庭の訪問を委嘱
11	さかのぼる	被害児童が大人になるまで継続的にケア 被虐待体験のある父親の問題が軽微なうちに関わる
12	権力の抑止	家庭内の状況の変化に応じてご近所で監視体制 危険家庭への強制介入

「児童虐待」の解決策の図解



事例(2)「いじめ」の課題を解く

■このテーマで特に注目すべきキーワード

①本人発

子どもに助けられ上手教育を。生徒会主体の活動

②1人ひとり

いじめを受けた子1人ひとりに上級生が寄り添う

③ポジティブ

元いじめっ子が現役のいじめっ子のメンターに。いじめっ子の能力開発

④ひらく

地域グループがいじめっ子を仲間に入れる

⑤さかのぼる

幼少期からいじめの芽を摘む（ご近所毎に目の細かい網を張る）

⑥権力の抑止

教室に反いじめ文化。スクールポリスの配置

(1)いじめ対策基本法には「これだ!」というものがない

ちなみに「いじめ対策基本法」の骨子を並べてみよう。

■学校とその設置者は、道徳教育や体験学習の充実▽早期発見の措置▽相談態勢の整備—を図る。

■複数の教職員やカウンセラーらによるいじめ防止対策の組織を学校に常設。

■行政は、いじめ防止のための教員研修や人材確保などの措置をとる。

■保護者は、子どもへの規範意識の指導や学校などの取り組みへの協力に努める。

■いじめがあった場合、学校は、速やかな事実確認▽被害側への支援▽加害側への指導・助言▽重大な犯罪行為は警察への通報—などの措置をとる。

■いじめた子には懲戒や出席停止措置を適切にする。

これを順に見ていって、目に留まる箇所があるだろうか。「これだ!」と言えるものがない。いじめの問題を本当に解決するには、根本的に欠けているものがある。

(2) 「主役は自分たち生徒だ」

基本法に関するNHKニュースの取材を受けた中学生たちの多くが、「もしいじめをなくすことができるとしたら、その主役は学校や教師ではなく、自分たち生徒だ」ということを言っていた。「学校や先生だけ努力したって、いじめはなくせない。でも自分たち生徒がいじめに対応する力をつけていけば、変えられるかもしれない」ということなのである。

(3) 「いじめに強い教室」作り

では生徒がいじめに対応する力をつけるためには、どのような方法があるのだろうか。当事者力を重視する欧米での事例を調べてみると、(1)クラス全体を教育して「いじめに強い教室」をつくる方法と、(2)「ピア・サポート」に属する方法があった。

(1)の場合は、いじめはクラス全体がそれを容認しなければ継続できないという弱点を利用し、いじめが生じる前にクラス全体に「反いじめ」の文化を根づかせてしまい、いじめの芽が生じても、それを抑えられるクラスをつくろうという。

たとえばアメリカ・メリーランド州のアーバナ中学校では、カリキュラムの中にいじめについて学び、考える時間を設けて、日常的に徹底した教育を行う。教師はいじめの構造図を見せ、どのようにいじめが起こり、発展するのか、そしてどのようにそれを止めるのかをていねいに教える。「コミュニティ（クラス全体）は、い

じめっ子を支援することを拒否し、大人に話すか、間に入っていじめられている子を助けることで、いじめっ子の力を奪うことができるのですよ」。(National Public Radio より)

(4)上級生が相談役と監視役

(2)の「ピア・サポート」は、イギリスでは政府が主導し、民間団体が実践の中心になって、2008～2010に全国150の学校でモデル事業が実施されている。

①**1対1のサポート**…上級生と下級生をペアにして、日常的に2人で会う時間をつくる。学校内でのお兄さん・お姉さんとして擁護し、いろんな話をしたり一緒に活動をする。

②**グループでのメンター活動**…下級生をグループにし、そこに上級生を頼れるリーダーとしてつけて、良い影響を与えたり、相談に乗ったりさせる。

③**ドロップイン・セッション**…いつでも相談に乗ってくれる上級生が、特定の部屋で待機している。ある学校では、メンター役の上級生たちが他の生徒に紛れて校内を巡回し、いじめなどの問題を抱えていそうな子を見つけ出してはそっと話しかけ、必要に応じてサポートするという方法で成功しているようだ。

④**休み時間に遊びを監督**…小学校で人気の方法。休み時間は先生の目がなく、ちょっとしたいざこざがいじめにつながりやすい。そこで、メンターの印をつけた上級生が校庭で下級生の遊びに交じり、上手に問題を解決させたり、ゲームのリーダーシップをとったりして、ポジティブな雰囲気づくりを行う。

⑤**問題の調停役**…特別なトレーニングを受けた上級生が、「問題解決専門」のメンターとして活動。個人やグループでの言い争いや対立に調停役として関わり、双方が冷静に言い分を述べて、納得できる合意に至れるよう、間に立って指導する。

⑥**サイバー・メンター**…インターネット上でのいじめの増加に対応するため、学校が上級生にパソコンやネット環境を提供し、トレーニングを行い、ネット上でメン

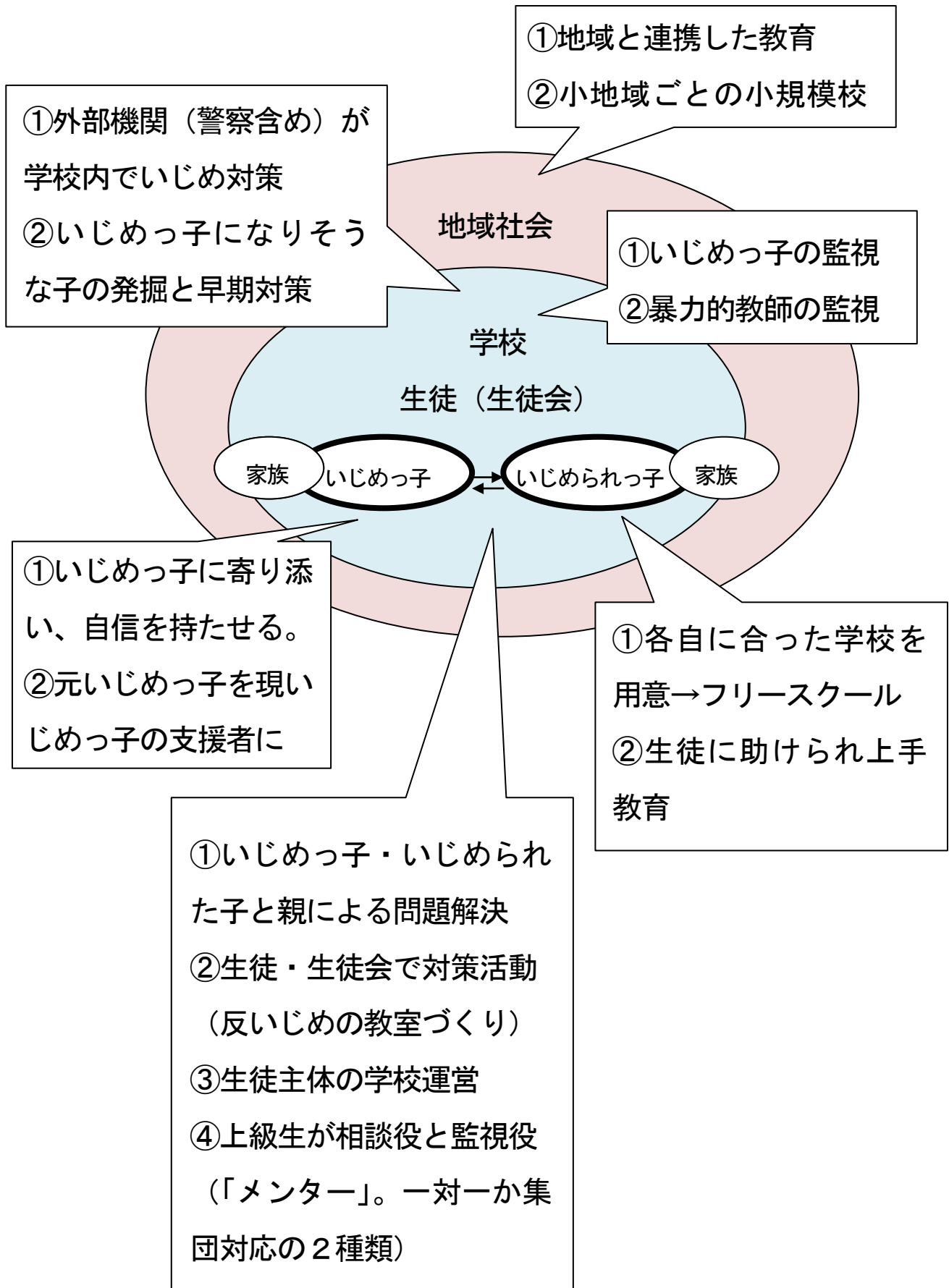
ターとして活動させる。

(5)いじめっ子に寄り添い、自信をつけさせる

加害者になる子どもは、必ず問題を抱えている。日本でピア・サポートという方法を取りいれるのであれば、上級生がメンターとして擁護する必要がある相手は、いじめの被害者だけではないということをよく認識する必要があるようだ。

何らかの問題を抱えている子が、すでにいじめっ子になっていたり、これからいじめっ子になっていくかもしれない。その子に寄り添い、支援して自信をつけさせることこそ、いじめを根本的に解決する手段になるのだ。

アメリカの学校では、問題行動をする子に上級生のメンターがついて親身に悩み事の相談にのったり、「元いじめっ子」を、下級生の「現いじめっ子」のメンターに据えてしまうといった方法も取られている。



1	本人発	生徒に助けられ上手教育 生徒会主体の活動
2	一人ひとり	いじめを受けた子1人ひとりに上級生が寄り添う、 または集団対応
3	フェアネス	元いじめっ子によるいじめ救済活動を顕彰
4	スロー	いじめを受けた子に登校を強要せず、フリ ースクールなどの選択肢を提示
5	日陰に光を	小地域ごとの小規模校への転換（町内小学校）
6	森羅万象	「自然の中の新しい学校」像を作り出す
7	ポジティブ	元いじめっ子が現役のいじめっ子のメンターに いじめっ子の能力開発
8	全体を見る	いじめを生まない学校づくり
9	アマチュア	スクールカウンセラーに地域の世話焼きさんを委 嘱
10	ひらく	いじめっ子を地域グループが受け入れ 外部機関や住民が校内のいじめ対策に参加
11	さかのぼる	幼少期からいじめっ子の芽を摘む 些細なもめ事でも両者による対話を仲介（上級生）
12	権力の抑止	スクールポリスを配置 教室に反いじめ文化

事例(3)「ひきこもり」の課題を解く

■このテーマで特に注目すべきキーワード

①本人発

本人のライフスタイルの一部と容認

②1人ひとり

本人の「こだわり」にのる

③フェアネス

I T技術のフル活用で（家にいたままで）社会との交流を可能にする

④森羅万象

自然や動植物との触れ合いを突き止める

⑤ポジティブ

本人の家を福祉施設として認知し、支援

⑥アマチュア

こじあけ屋さんの出番

⑦ひらく

誰かとは接触している。その人を突き止めよう

(1)その人のライフスタイルとして尊重

地域のふれあいの輪に入っていない人を「困った人」と見る傾向がある。「ふれあい」圧力がかかっているのだ。引きこもりについても、一方的に否定するのではなく、その人が望むライフスタイルとして尊重すべきだという考え方もできる。

ある地域で支え合いマップづくりをしたとき、1人の引きこもりの男性が周りに

奇異の目で見られていた。彼は外出するときに女装していたのである。周りの人たちは彼のことを笑って話している。笑われていることを本人も知っている。「その人なりの生き方」があることを、もっと理解してあげる必要がある。

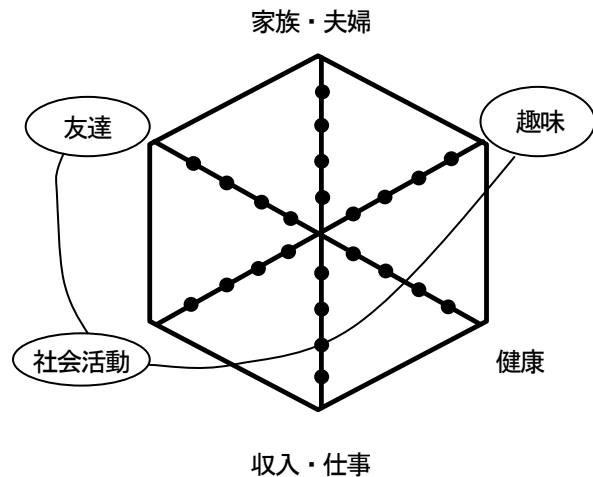
(2)完全に引きこもりの人はいない。相性の合う誰かがいる？

これまでのマップづくりでわかったのは、引きこもりと言われている人でも、完全に誰とも交流していないということはなく、1人か2人とは接触しているということだ。相性を大事にする人だから、それに合う相手はなかなか見つからないが、1人もいないということはない。

(3)何かこだわっているものがある。そこから接触

もう1つ、本人がこだわっているもの（興味・趣味）を見つけて、そこを接点にすれば接触しやすい。その人も豊かに生きていたいと思っているが、人が豊かになるには、「趣味」「友だち」「社会活動」「仕事」「家族」「健康」という6つの要件を充足する必要がある。そこで、そのこだわりを生かして他の要件も充足できるような支援をするという方法がある。

「こだわり」は趣味活動だ。そこから、作ったものをプレゼントしたり、技術を使って人のために何かをすることができるというように、引きこもりの人でも、「趣味」→「社会活動」は、つながりやすいのである。



(4) I T 技術のフル活用で社会と交流可能にする

今の I T 技術を使えば、家の中にいたままでも、社会と十分に交流できる。そのハードを引きこもりの人には優先的に貸与するなりすればそれでいいのだ。ソフトの方は、誰かが教えればいい。

(5) 長屋のような界隈で暮らしてみる

プライバシーがほとんど存在せず、しかも世話焼きさんなどがひしめいている長屋のようなご近所というのがある。こういうところだと、引きこもりようがない。つまり一定期間でもそういうところで暮らして、引きこもりが事実上、できない状態に置いてみる。

(6) 家族がご近所さんに当事者の見守りなどを願う

周りの人は、お節介するのを躊躇する。そこで本人の親などからお願いされれば、関わりやすくなる。

(7) 動植物とはふれあっている。そこから入ろう

「自然・環境」というキーワードがあるが、それをヒントに考えると、引きこもりの人が、動植物とはふれあっているというケースは多い。人とふれあうのは苦手な

も、例えばカラスを飼ったり、猫を何十匹も飼ったりしている。

まずこれを「ふれあい」と認めることから、次の策を考えてみたらどうか。植物と親しんでいる引きこもりの人もいる。これを接触のチャンスと考えるのだ。

(8)家は「社会福祉施設」なのだ！

「引きこもり」をポジティブに捉えてみたら、家に引きこもっているというのは、そこが心地よいからだろう。ならば、まずそれを認めてあげることから、対策を講じたらどうなのか。

家を、その人にとっての社会福祉施設と考えるのだ。施設長は母親か。その上で、その「施設」への支援を強化しながら、家族を開かせていく、という手法が考えられる。以前、千葉市だったか、障害児のいる家をワークホームと認知し、補助金を支給していた。

(9)引きこもりは本人の一部。生活全体を見て関わっていく

私たちは「引きこもり」の事実だけを針小棒大に見る傾向がある。これもその人の生活の一コマにすぎないと見て、別の角度から接触していくというのも大事ではないか。

(10)こじあけ屋さんによる関わりも

引きこもっている人を、こじあけ屋さん（閉じている家に入るのが上手な世話焼きさん）がこじあけたという事例をいくつも知っている。いずれのケースでも、こじあけ屋さん自身は「そんなに難しくはない」と言っていた。あるケースでは、一人暮らしで要介護の高齢男性が引きこもっていたが、世話焼きさんは、すまして玄関を開け、勝手に掃除を始めた。「誰だ、うちに来るのは！」と怒鳴り声がしても、女性は平然としている。翌日は次の間を、翌日はその次の間を、そして次は本丸に

攻め込んだ。私も彼女に誘われて、その引きこもりの男性宅を訪れたが、全く普通の男性になっていた。「周りの連中がうちに井戸端会議に来るんだよ」と満更でもない顔をして言っていた。

(11)誰かには接触している。その人がひらけ！

引きこもりの人でも、自分が「この人なら」と見込んだ誰かには近づいている。コンビニの店員とか、こだわっている趣味の関連の店舗とかで、その相手とは、全く引きこもりとは思えない感じで付き合っている。その相手が、積極的に交流してくれればいいし、その人を通せば、ほかの人に関わることができる。

(12)引きこもる原因になった出来事まで遡ってみる

地域にふれあいサロンがいくつかあった時はそこに参加していたが、それらのサロンが解散してから引きこもりになったとか、奥さんに亡くなられてから人との交流を避けるようになったとか。そこから対策を講じるのだ。

1	本人発	その人のライフスタイルとして尊重
2	一人ひとり	本人と相性の合う人を探す 本人の「こだわり」に乗る
3	フェアネス	I T技術のフル活用で社会と交流可能にする
4	スロー	長屋のような界隈で暮らしてみる
5	日陰に光を	家族がご近所さんに当人の見守りなどをお願いする
6	森羅万象	動植物とのふれあいを探す
7	ポジティブ	当事者の家を福祉施設として支援
8	全体を見る	当事者の生活や人間性の全体を見る
9	アマチュア	こじあげ屋さんの出番
10	ひらく	誰かとは接触している。その人を突き止める
11	さかのぼる	引きこもりになった原因まで遡ってみる
12	権力の抑止	

事例(4)「認知症」の課題を解く

■このテーマで特に注目すべきキーワード

①本人発

助けられ上手の腕を磨いておく

②一人ひとり

心を委ねられる寄り添い人を確保しておく

③フェアネス

認知症の人にこそ超高級福祉を。かつこいい「お散歩」スタイルはいかが？

④スロー

認知症の人が生きやすいスローな社会づくり

⑤森羅万象

自分の周りに癒しの世界をつくる

⑥ひらく

会社やグループが本人を受け入れ続ける

⑦さかのぼる

進行した時のことを含めて、自分が受けたいケアのあり方をまとめておく

(1)認知症の人への福祉活動のあり方

ここに提示されてある項目は2種類ある。1つは、認知症の人への福祉活動のあり方、どういう支援ができるかということ。もう1つは、認知症の本人がやっておくべきこと。ほとんどのアイデアがこれに該当し、2つが重なっているものもある。

(2)認知症の人にこそ超高級福祉を

認知症の人の誇りを守るためには、尋常のレベルの福祉では駄目で、思い切って、一般の人が羨むぐらいの福祉でないといけない。ファッション・化粧・旅行・仕事・住居など。

イギリスの元首相のサッチャーさんは、認知症になったが、亡くなるまで誇りを維持し続けた。ロンドン公園でくつろぐ彼女が「ハパラッチ」されたが、記者は、ファッションからヘアスタイルに至るまで、一分の隙もなくエレガントで威厳を保っていたと感嘆していた。

認知症になってからも外出を楽しみ、ブレア元首相にエスコートされるなどして、公的な場に出続けた。亡くなるまで、政治家時代の親しい友人たちに囲まれ、自宅や友人の別荘、最期は「ホテルリッツ」のスイートルームで過ごした。これこそが、認知症の人にとっての夢の生活かもしれない。

[News](#) | [Sport](#) | [Comment](#) | [Culture](#) | [Business](#) | [Money](#) | [Life & style](#) | [Tr](#)

[News](#) > [Politics](#) > [Margaret Thatcher](#)

Lady Thatcher's final days cheered by puppy antics and tales of former PMs

Ex-private secretary Lord Powell among small circle of trusted friends who worked hard to keep her entertained and stimulated



ガーディアン紙

(3)かわいい「お散歩スタイル」はいかが？

サッチャーさんほどではなくても、認知症の人はだれでも、その人なりにプライドを持てる生活スタイルを実現できる必要がある。私の町でも、近隣の高齢者施設の入所者を含め、高齢の行方不明者を探してほしいという町内放送がときどき流れるが、その時に気になるのは、着ているものや靴、持ち物などが、いかにも認知症の人と推測できるスタイルであることだ。

(4)心を委ねられる寄り添い人を

認知症が進行した時、本人が心を委ねられる寄り添い人を確保する必要があるが、サッチャーさんには、2人の付き人がいて、彼女を常時守っていた。特にその1人（ケイトさん。写真中央。右がサッチャーさん）は素晴らしい人で、周りから「神からの贈り物」と称賛されていたという。

(5)社会生活を継続できるよう職場やグループが受け入れ続ける

認知症になっても通常通りの生活ができるよう、職場や趣味グループなど、周囲の各組織が受け入れてくればよい。

サッチャーさんは、症状が進行しても、政治家の集まりなどに出かけ、自ら演説もしたという。同じセリフを繰り返し始めると、夫が指で机を叩いて合図を送ったそうだ。夫が亡くなった後は、政治家時代の部下たちがローテーションを組んで訪問し、政界のあれこれを報告していたという。

(6)認知症でも人を指導できる特技を持つ

何らかの特技を探し、磨きをかけておく。認知症になっても続けられるもの、できれば人を指導できるものを選ぶ。

踊りの師匠をしていた女性が認知症になった。しかし踊りのことは片時も忘れていないようで、時々身振り手振りをしていたようだ。そこで町の方から踊り教室の講師の依頼をして、10名ほどに教えたという。その後も踊りが組み込まれるイベントに参加し、それまでは家に引きこもっていたのが、講師をしてからは、あちこち出歩くようになったようだ。

福岡のある認知症の女性は、元生け花講師で、近所を歩き回りながら、人の家の生け花の手直しをしていた。それならと、彼女を講師にして生け花教室が開かれた。

彼女は元美容師でもあり、デイサービスに行ってもその腕を生かして、利用者に尽くしていたという。

(7)助けられ上手になっておく。お返しができる何かを持つ

認知症になる前から、助けられ上手の腕を磨いておく。自分なりのやり方を体得する。一方で、助けてもらった時にお返しができる何かを持っておくことも大切。

(8)元気なうちに、人に尽くしておく

地域はそういうルールになっている。配偶者が地域に尽くしていた場合も、自分が要援護になった時に助けてもらえる。ある世話焼きの女性は、認知症になっても、人に尽くし続けている。

(9)認知症の人にピッタリのスロー社会づくり

認知症だからこそ豊かに暮らせる街—すべてがゆったりと動くスロー社会のモデルを作る。自然豊かな癒しの街づくり。今の社会のスピードは認知症の人には速すぎる。もっとゆったりと生活し、行動できる街をつくる必要がある。

(10)自分でスローな環境をつくっておく

自分が高齢や認知症になる前から、自分の生活する場として、スローな環境をつくっておく。思い切って環境を変えるか、今の生活の場を最低限、スローに生きられる場にしておくか。

(11)進行したらどのようにケアしてほしいかを伝えておく

軽度のうちに、どのように支援してもらいたいかを考え、家族などに伝えておく。助け手も何人か予約しておく。若年性の認知症と診断されたイギリスの女性医師が、

症状が進行した時に家族やほかの人が自分とコミュニケーションをとりやすいようにと、自分の人生を写真と文章でまとめた。これを見れば、私が今どの時代について、あなたを誰だと思っているかがわかるはずですよ、と。彼女は自分をどのようにケアしてほしいかも文章でまとめて、家族などに渡している。

(12)自分の周りに癒しの世界をつくる（つくっておく）

自分にとって、癒しになる物・人・活動を見つけて、それらを自身の周囲に配しておく。認知症になる前から実践しておく。自然環境、ボランティア、ふれあい（子ども、高年者、身内）、家族（茶のみ友達）、家庭環境（庭、花、水、樹木）、静寂。

(13)自宅開放でサロンを開く

一人暮らしの高齢の女性がよく実践していることで、集まってくる人たちが自分の見守りをしてくれる。

(14)介護者の暴力・抑圧を防ぐネットワークづくり

特に息子が介護をしていて支援を受けるのが苦手な場合、このリスクが高くなる。息子の暴力から守るための抑止ネットが必要だ。

1	本人発	認知症でも人を指導できる特技を 助けられ上手の腕を磨いておく
2	一人ひとり	心を委ねられる寄り添い人を確保 向こう三軒、ご近所、町内それぞれに
3	フェアネス	認知症の人にこそ超高級福祉を カッコいい「お散歩スタイル」はいかが
4	スロー	認知症の人に適したスロー社会づくり 自身の周りにスローな環境をつくる
5	日陰に光を	
6	森羅万象	自分の周りに癒しの世界をつくる
7	ポジティブ	自宅開放でサロンを開く
8	全体を見る	まだ元気なうちに地域に尽くしておく 助けられた時、お返しができる何かを持っておく
9	アマチュア	
10	ひらく	普通の社会生活を続けられるように、 会社・グループがその人を受け入れ続ける
11	さかのぼる	進行した時にどのようにケアしてほしいかを伝えて おく
12	権力の抑止	介護者の暴力・抑圧を防ぐネット

事例(5)「一人暮らし高齢者」の課題を解く

■このテーマで特に注目すべきキーワード

①本人発

助けられ上手になろう。見守られ上手になろう。一人暮らし同士で助け合おう

②1人ひとり

個々のライフデザインと実践の支援をペアで

③フェアネス

ホテルの有名シェフが腕を振るう会食会

④日陰に光を

一人暮らし高齢者と、息子や娘と、隣人で三者歓談

⑤ポジティブ

自分の周りに自分用の癒しの世界をつくろう

⑥アマチュア

一人暮らしの世話焼きの高齢者が子どもの駆け込み寺

⑦ひらく

一人暮らしの人が自宅開放で子ども食堂

⑧さかのぼる

要介護でも豊かに暮らせるご近所をつくっておく

(1)見守られ上手さんになろう。福祉教育も転換すべし

この問題への対処で主役となって動くべきは、一人暮らしの高齢者自身だ。一人暮らし高齢者と言えば、まず周囲の人たちがこの人をどう見守るか、ということが

議論されるが、じつはその反対だ。

見守りというのは、周囲が遠くから見守るだけでは、その人の状況はよくわからない。だから重要なのは、まず本人が自分の安全を守る意識を持ち、周りの人に協力を求めて、自分の状況をわかりやすく伝えていくことである。

地域福祉のあり方を根本的に改める必要がある。住民が対象者をどうやって探し出し、どうやって助けるかと考えるのではなく、まず本人がどうやって自分の問題をアピールし、どうやって上手に支援してもらうかを主体的に考えるような福祉のあり方に変えるのだ。子どものうちから、そういう福祉のあり方を教えていく必要がある。

(2)今のうちから人に尽くしておく

助けてもらうためには、今から自分も人に尽くしておかねばならない。それが地域のルールである。助けられる一方で、老人クラブや町内会に加わって、自分ができることで人のために活動しておく必要があるのだ。そうすれば自然と、困ったときや見守りが必要な時には、誰かが助けてくれる。自助と共助を一体として行動するのだ。それができるよう、これから述べる(4)が必要になる。

(3)要介護でも豊かに生きられるよう助け合いのご近所づくり

たくさんの方が、一人暮らしで超高齢期を迎える。そのために、どんなに要介護になっても、豊かに生きられるようなご近所を作っておく必要がある。

そのためには、老人クラブや趣味グループ、サロンなどが、それぞれのご近所にできていなければならない。そして、それらのグループが要援護になった人を仲間に迎え入れる必要があるのだ。

今はそうしたグループは、せいぜい町内ごとに組織されているが、これを変えていかねばならない。

(4)活動グループは担い手と受け手を分けない

老人クラブも含め、福祉活動グループで、担い手と受け手を分けないあり方を広めていく必要がある。そうすることで、一人暮らしの人も、例えば老人クラブの中で、要援護でも担い手にもなれるので、両方を体験できることになる。介護グループなども、要介護の人は対象者だと決めつけず、柔軟な扱いをすれば、その人も何らかの形で担い手になって人の役に立つ機会を得られるかもしれない。

(5)近くの一人暮らしの人同士で助け合い

地域では、特に女性の場合、ご近所内の一人暮らしの人同士で助け合っているケースが多く見られる。お互いが、相手の困り事も知っているので、都合がいい。特に災害時には、一緒に連れ立って避難しているようだ。

(6)個々のライフデザインと実践の支援をペアで

一人暮らしの人も、それぞれ固有の生き方がある。各自のライフデザインづくりを支援し、その実践も同時に応援する。ボランティアの1人が、1人のライフデザインをペアで支援する。その人が日常的に訪問しての具体的な支援を継続する。

(7)ホテルの有名シェフが腕を振るう会食会

一人暮らしの高齢者を集めての会食会はよくあるが、たまにはホテルの有名シェフが腕を振るう豪華な会食会があってもいい。そうすることで「一人暮らしの生活」というもののイメージが上がるのだ。

(8)有名人がホスト役のサロンにご招待

同じようにして、一人暮らし高齢者が参加するふれあいサロンも、時には有名人

がホストを務めるといった豪華なサロンを開くと、これまた一人暮らしの生活のイメージが上がる。

(9)自分のご近所に「長屋」的な世界をつくる

名古屋のあるご近所で、数軒が団結して「長屋」的な関係を作り出した。垣根を取り払い、お互いの家は出入り自由にし、道路は「あいさつ道路」と命名して、誰もが挨拶をする道路とした。

(10)通ってくる子どもが、ご近所さんに挨拶をする

一人暮らし高齢者のもとに時々通ってくる息子や娘がいる。買い物などを行っているが、もう1つ大事なことがある。

ご近所さんが日常的に見守ったり、おすそ分けをしたりしてくれているのだから、親を訪ねたついでに顔を出して、「いつもありがとうございます」と一言お礼の挨拶をするということである。そうすればご近所さんも、関わりやすくなる。

(11)一人暮らしの人とその子どもとご近所で「三者歓談」

同じご近所に住む一人暮らし高齢者は、共同で安全を図る必要がある。そこで一人暮らしの人たちとその人たちの子ども、そしてご近所の人たちが一堂に会してふれあい、いざという時に助け合えるようにしておけば、災害時にも一緒に避難できる。

(12)自分の周囲に癒しの世界を作ろう

一人暮らしの人を支えてくれるのは、人間だけではない。ある一人暮らしの女性に、何に癒されているかと聞いたら、いろいろなキーワードを並べた。畑、家、手毬、写経、弟、ボランティア活動、ふれあい、子ども（時々遊びに来る近所の子）

など。

このような自分にとって癒しになるものを、意図的に自分の周りに配することを、それぞれの一人暮らし高齢者が実践するといひ。

(13)一人暮らしだけのボランティア・グループ

一人暮らし高齢者という、いかにも福祉の対象者というイメージがある。それがこの言葉に暗い影を投げかけている。そこで逆に、私たちは一人暮らしだけれど、ボランティアをするグループなんですよと言えれば、イメージチェンジになるのではないか。

- ①町内会の班長は進んで引き受けます。ただし要介護になったら、副班長をつけてください。
- ②一人暮らし高齢者の見守りはまず自分たちで取り組みます。引きこもりの男性などの見守りもします。
- ③要介護者の家も訪問し、介護者のお手伝いをします。おむつ替えもできます。
- ④オレオレ詐欺等の電話があれば、すぐに一人暮らしの人の間で情報を共有します。
- ⑤私たちを見守ってくれる方々と、ときどき連絡会を開きます。
- ⑥一人暮らしのメンバーに緊急事態が起きれば、班長や町内会長などに連絡します。
- ⑦生活の知恵がありますので、ヌカミソのつくり方などを教えます。
- ⑧同じ一人暮らしとして、引きこもりの人やご近所に迷惑をかけている人などに接触し、悩みごとの相談にも乗ってあげます。

(14)要介護の一人暮らし高齢者たちで介護相談所

要介護の一人暮らし高齢者たちの体験を生かして、介護の仕方、され方を教える。介護者の家を訪問し、地域から支援のいただき方、介護者としてできることなどを教える。

(15)一人暮らしの世話焼きさんたちで「子ども駆け込み寺」

親から虐待を受けている子、教師から暴力を受けている子などのための駆け込み寺を。高齢者は在宅の時間が多く、子どもが好きで、子どもにとって最高の資源だ。

(16)一人暮らしのメンバーで「子ども食堂」を開く

食事作りが得意で、子どもと一緒にならもっといいという場合、一人暮らしの人たちでグループを作り、メンバーの家で小さな子ども食堂を開いたらどうか。

(17)子どもと近居を。二世帯住宅で同居も

困ったときに手助けしてもらうために、子どもに近居してもらおう。それを条件に資金面で援助をする人もいるし、二世帯住宅を建てて同居する人もいる。

ある主婦は神奈川県に住んでいて、子ども3人は皆、東京に移り住んだが、彼らにこんな提案をしたという。「わが家から〇分以内の所に家を建てるのなら、資金を援助するよ」。今では3人とも、近居している。

(18)要介護でも豊かに暮らせるご近所をつくっておく

いずれ要介護になっても、ご近所で豊かに生きていけるようにしておく。そのために、例えば…

①サロンは、自分のご近所のメンバーで二次会を開くようにする。要介護になった人も受け入れるようにしておく。

②趣味の会は、同じご近所からメンバーを見つけて、自分たちで会を作る。ここも同様に、メンバーが要介護になっても受け入れるようにしておく。

③一人暮らしの高齢者どうし、お互いの子どもやその家族と親しくなり、支援が必要な時にだれかに駆けつけてもらえるようにする。誰かが要介護になっても、訪問

し合う。

④ご近所内の看護師や保健師、ケアマネジャーなどと親しくしておいて、必要な時に助けてもらうようにする。

1	本人発	助けられ上手になろう 一人暮らし同士で助け合い
2	1人ひとり	個々のライフデザインと実践の支援をペアで
3	フェアネス	ホテルの有名シェフが調理する会食会 有名人がホスト役のサロンにご招待
4	スロー	自分のご近所に「長屋」的な世界をつくる
5	日陰に光を	通ってくる子どもにご近所への挨拶をさせる 一人暮らしと子どもとご近所で「三者歓談」
6	森羅万象	周囲に自分用の癒しの世界を作ろう
7	ポジティブ	一人暮らしの人たちでボランティア・グループ
8	全体を見る	要介護の一人暮らし高齢者たちで介護相談所
9	アマチュア	一人暮らしの世話焼きさんたちで「子ども駆け込み寺」
10	ひらく	一人暮らしのメンバーで子ども食堂を開く

11	さかのぼる	子どもに近居してもらおう。二世帯住宅で同居する要介護でも豊かに暮らせるご近所をつくっておく
12	権力の抑止	

事例(6)「家庭介護」の課題を解く

■このテーマで特に注目すべきキーワード

①本人発

介護者が自ら活動をオープンにし、助けを求める。自分もやるべきことはやる。

②1人ひとり

介護される当人の意思、生き方が尊重されているか。

③スロー

介護をテーマに、ご近所づきあいをしかけていく。最難関だがこれができるか。

④森羅万象

介護の現場を当人や介護者、支援者の癒しの場にしなければならない。

⑤アマチュア

介護はプロの仕事と思われている。これを崩していくことができるか。

⑥ひらく

自宅開放によるふれあいのご近所づくり。

(1)これは自宅開放型社会福祉事業だ

意識の高い介護者は、似たようなことをしている。以下にならべてみよう。

- ①ご近所とおつき合いをしておく
- ②介護をしていることをオープンにする
- ③ご近所にも介護を手伝ってもらう
- ④介護中でもできることはする（町内会役員、PTA役員等）
- ⑤介護される側もボランティアを教育
- ⑥ご近所で介護をしている人の手伝い

こういう人は、ただ個人的に親の介護をしているというよりは、自宅を使って介護の事業をしているという意識だ。事業といっても、自分で何でもしてしまうのではなく、地元の人たちを上手に活用しているし、介護されている人にもその人なりの役割を果たしてもらおう。その代わりに自分も、地域住民としての役割を果たすし、他の人の介護も手伝う。理想に近いやり方をしている人は、これらのほとんどをこなしている。こうなると、自宅が福祉センターになるのだ。

(2)住民を自宅に引き入れる

介護中の人と介護される側の人、偏った力関係になる可能性もある。そこで介護者による虐待も起きる。そんな時、開かれた介護をしていれば、始終だれかが訪れるので、それを抑制することができる。

(3)当事者本人が自分の生き方を選択

要介護になると、自分の生き方を主張できなくなり、サービスについても、介護者の都合で決められたりするということが起きる。しかし要介護になっても、生き方を決めるのはその人自身だということを尊重する。

(4)要介護でも豊かな生活をおくりたい

寝たきりになったら、豊かな生活をなどと贅沢なことは言ってはならないといった圧力が出てくる。圧力はなくても、結局、自分で遠慮してしまうが、そうではなく、要介護になっても豊かに生きることを諦めない。寝たきりになっても、化粧がしたい、パーマをかけたい、おしゃれがしたい、旅行に行きたい、趣味活動がしたいなど。

(5)美容サービスの出前（お1人様でもOK）

寝たきりの人のためにサービスの出前。1人でもOKです。理容美容、歯科診療、入浴など。

(6)寝たきりの人のための貸し切り旅行サービス

旅行業者が、寝たきりの人のための特別な旅行プランを企画した。同じ様にして、ショッピングや墓参なども実現すればいい。

(7)当事者や介護者の周囲に癒しの要素を配する

当事者や介護者にとって癒し効果のあるものは何か。それを両者から聞き取って両者の周りに配置する。各世代とのふれあい、子ども、趣味、家屋、家具調度、庭など。

(8)枕元で事実上のご近所づきあいを仕掛ける

枕元を仮想のご近所空間とみなして、そこにご近所の人たちを引き入れて、スローな世界を作り上げる。テーマを介護にして、介護を通してご近所がふれあうという難しい課題に取り組む。

(9)介護をふれあいの道具にしてしまう

介護と言えば、とにかくつらい営みだというのが常識だが、これを逆にふれあいの道具として楽しんでしまう。

(10)介護のアマチュアリズムを普及

介護保険が始まる前は、介護は当たり前家庭で行われていたが、介護保険制度が導入されると、介護はプロがするもので、素人にやらせるのはいけないという空気ができてしまった。むろんヘルパーがやっていたが、本人の意思で「私がやりたい」という人の考え方も尊重する風潮を作っていく必要がある。介護は元々アマチュアの世界だったということを普及させる。

1	本人発	ご近所にも介護を手伝ってもらう 当事者本人が自分の生き方を選択
2	1人ひとり	美容サービスの出前（お1人様でもOK）
3	フェアネス	寝たきりの人のための貸し切り旅行サービス
4	スロー	枕元で事実上のご近所づきあいを仕掛ける
5	日陰に光を	要介護でも豊かな生活をおくりたい
6	森羅万象	当事者や介護者の周囲に癒しの要素を配する
7	ポジティブ	介護される側の人にも役割を 介護をふれあいの道具にしてしまう
8	全体を見る	介護中でもできることはする
9	アマチュア	介護のアマチュアリズムを普及
10	ひらく	これは自宅開放型社会福祉事業だ 各業界が要介護者向けサービス
11	さかのぼる	ご近所とおつき合いをしておく
12	権力の抑止	住民を自宅に引き入れる

事例(7)「ゴミ屋敷」の課題を解く

■このテーマで特に注目すべきキーワード

①本人発

本人の意向を探るのが先決。そして接触するのも本人が認めた人であること。

②1人ひとり

ゴミ屋敷と一口に言っても1人ひとりで事情も状況も異なる。

③スロー

ご近所さんで継続的に関わるのが大切。

④全体を見る

ゴミ屋敷をどうするかだけではなく、まず本人が豊かな人生を送るのを助けることが大切。本人は何かにこだわっている。それが何かを探り、そこから入っていく。

⑤アマチュア

通常の働きかけでは門戸を開けない場合は、こじあけ屋さんを活用。

一口に「ゴミ屋敷」と言っても、本人の事情や性格などによって状況は千差万別だから、基本はそのことを踏まえて対策を講じることが大切だ。ここでは、キーワードの順に沿って解説していこう。

(1)本人が認めた相手が中心になって接触

こういう難ケースについては、地域福祉コーディネーターなどのプロが駆けつけて対応するようだが、大事なことは、本人がその人を認めているかどうかである。ご近所さんで「あなたなら家に入ってもいい」と「ゴミ屋敷」の当主に言ってもら

える人を選ぶのが基本だ。

(2)本人の「ゴミ屋敷」の意図を探り対応

本人はどのような意図を持ってゴミ屋敷にしているのかを探る必要がある。片づけられないからなのか、何らかの目的を持って物をためているのか。

(3)パターン化せず、1人ひとりの主義を尊重

ゴミ屋敷になってしまう人はこうだからと、一方的にパターン化するのではなく、その人なりの主義があるはだから、それを探る必要がある。

(4)その人に専属の片付けの名人を派遣

ポイントは、1つは「片付けの名人」であること。もう1つは「専属」であることで、その人のためだけに協力する。3つ目は「継続」すること。しばらくは、毎週何曜日に通うとか。

(5)ご近所さんで継続的で親密な関わり

一度片づけても、放置しておくとも、また物をためてしまう。そこで、ご近所さんが、ご近所のおよしみで継続的に関わるのが大切。ゴミ屋敷を何とかしてあげるといふことよりも、ご近所づきあいの気持ちで関わる。

(6)その後も「ゴミ屋敷」になる前に訪問

ご近所だからよくわかるだろうが、そろそろまた、たまってきたなど分かるから、その都度すぐに関わるようにする。場合によっては、その人の生活スタイルを、もっとゴミの出ないあり方に、徐々に変えさせていくことも視野に入れる必要がある。

(7)ゴミ屋敷になる理由を研究

どうして「ゴミ屋敷」になってしまうのか、その理由を研究するという手もある。そこから、対策が出てくるかもしれない。

(8)ゴミ屋敷の予備軍への関わりも

別に「ゴミ屋敷」と言われる人だけでなく、私たち自身も、ちょっと油断すると、たちまちゴミ屋敷の予備軍になってしまう。「予備軍」にも関わりをする必要がある。関わり方は、「ゴミ屋敷」対策とは異なる。

(9)ゴミ屋敷で本人はどう癒されているか調べる

もしかしたら本人は、たまり続けるごみに、ある意味、癒されているのかもしれない。ゴミの何にどのように癒されているのかを調べ、そちらからアプローチする方法を考える。

(10)本人はゴミと思わない、から出発する

こちらは明らかにゴミと思っても、本人は「ゴミではない」と思っているから、その辺りを詳しく聴取することが大切だ。対策はここを明らかにしてから考えることになる。

(11)収納のあり方のモデルハウスに

せっかくその家の片づけや収納を考えるのなら、この家を収納のあり方を教えるモデルハウスにしてしまう。最高の収納のあり方が求められる家であることを利用するのだ。収納のノウハウを開発するのもいい。

(12)本人の「こだわり」(ライフワーク)の完成を応援

ゴミを捨てようとするには、本人の生活全体を豊かなものにしてあげることが先決だという考え方もある。その1つとして、本人がこだわっているものを聞き出して、それを完成させるのを応援するのだ。

(13)豊かな生活を応援。生活の要求水準を上げさせる

生活が豊かになっていき、無気力な状態が改善されていくと、本人の要求水準も上がっていく。そうすると、身の周りがゴミに満たされていることに対して嫌悪感を持ち始めるかもしれない。

ある地域の女性ボランティアが、一人暮らし高齢者たちに一坪農園を提案した。それはうまくいったのだが、高齢者たちは身なりをまったく気にせず、まさに野良着で一日を過ごしているのが気になった。そこで女性は考えた。彼らに「銀ブラ」をさせてみよう。東京・銀座にもそう遠くないので、提案したらのってきた。その後は、着るものにも気を使うようになったということである。

(14)ご近所のこじあけ屋さんを発掘して派遣

地域には、引きこもりの家にも上手に入っていける「こじあけ屋さん」がいる。世話焼きさんの一種である。この人なら、割合たやすく入り込むことができる。

(15)本人宅で住民懇談会「我が家をゴミ屋敷にしないために」

きれいになった所で、当主宅で住民懇談会を開いたらどうか。こうなるとまたゴミ屋敷にしてはならないというプレッシャーがかかるから効果的だ。

(16)世話焼きの資質のある役場の担当者を探す

いずれは行政の協力が必要になるが、その場合に、杓子定規に考える人ではなく、

住民の要求にこまめに応じてくれる世話焼き的な資質のある人を見つけたほうがやりやすい。

(17) ゴミ屋敷が生まれた経緯を調べる

いつ頃どういう経緯でゴミ屋敷になってしまったのかを本人に聞いてみる。妻に亡くなられてから、一人暮らしをするようになってから、病気をしてからなど、何かがあるはずだ、それを聞き出して対策を考える。

1	本人発	本人が認めた相手が中心になって接触 本人の「ゴミ屋敷」の意図を探り対応
2	1人ひとり	パターン化せず、1人ひとりの主義を尊重
3	フェアネス	この人のための専属の片付けの名人を派遣
4	スロー	ご近所さんで継続的で親密な関わり その後も「ゴミ屋敷」になる前に訪問
5	日陰に光を	ゴミ屋敷になる理由を研究。 ゴミ屋敷の予備軍への関わりも
6	森羅万象	ゴミ屋敷で本人はどう癒されているのか
7	ポジティブ	本人はゴミと思わず、から出発する 収納のあり方のモデルハウスに
8	全体を見る	本人の「こだわり」（ライフワーク）の完成を応援 豊かな生活を応援。生活の要求水準を上げさせる
9	アマチュア	ご近所のこじあけ屋さんを発掘し派遣
10	ひらく	本人宅で住民懇談会 世話焼きの資質のある役場の担当者を探す
11	さかのぼる	ゴミ屋敷が生まれた経緯を調べる
12	権力の抑止	

事例(8)「デイサービス」の課題を解く

■このテーマで特に注目すべきキーワード

①本人発

利用者が主体者としてメニュー開発や運営に参加できるか？

②1人ひとり

ひとまとめにされるのではなく、個々の人に合ったサービスを提供されているか？

③フェアネス（ポジティブとも関連）

デイを福祉サービスでなく、もっと高級な生活支援の場にできるか？

④日陰に光を

デイを利用しない日々をどう豊かに生きられるか？

⑤アマチュア

地域での自主活動などでリーダーシップを取れる利用者を発掘できるか？

⑥ひらく

デイ利用者が地域グループや、カルチャーセンターに参加できる働きかけを。

(1)本人の行動からデイらしいものを見つけて、応援

こちらから提示しなくても、本人は生活の中でデイの代わりに自分らしい行動（活動）を開発している可能性もある。それを本人の言動から探り出し、その人らしいデイのメニューを作り出して、提案する。あるデイサービスセンターで、認知症の利用者が、限度一杯に保険を使っても、まだ何かしたいというので、デイでボランティアをしてもらっている。それでも足りないというので、商店街のゴミ拾いを提案した。それに所長も参加している。

(2)利用者たちで自主的にメニュー開発、運営も

スウェーデンにデイサービスの視察に行った人が語るには、あちらではデイサービスセンターと言わずに、デイアクティビティセンターと言っていた。つまり、利用者が主体的に活動する場だったというわけである。特定の事業に限って、自主活動をやってもらうという手もある。

函館市の小規模特養だが、おやつ作りを認知症の利用者に担当してもらっている。材料の買い物に行くところから認知症の人がやっていた。

(3)個々の「卒業」への条件・努力目標を立てさせる

デイはいずれは卒業し、自立しなければならない。あるデイサービスセンターでは「卒業式」をしていた。利用者各自が卒業のための条件を考え、それに向かって努力してもらうという方法もある。努力目標を提示するのだ。

(4)個々のライフデザインを作り、その実現を支援

利用者の目標を、「自立」というよりも、生涯をかけて豊かさ満開を実現することとし、それに向かって今はどんなことをしたらいいのかを利用者と一緒に考え、一緒に努力していく。あるデイサービスセンターでは、利用者数名の豊かさ度を測り、デイに来るようになって何がどう変わったかを検証した。

(5)メニューに豪華ゲストの招待も

サービス事業の中に、例えば一般住民でもこの人が来るなら行きたいとか、その人の話を聞きたいと思うようなゲストを招待することで、デイが福祉事業よりもレベルアップしたというイメージを与えることもできる。時々でも、そういうメニューを盛り込むといい。

(6)利用者をご近所毎に分け、ふれあい助け合いを支援

利用者を出身ご近所毎に分けて、地域ではできにくいふれあいをデイで実現させ、つながりをつくる。そしてこの関係を地元まで持ち帰れば、デイの役割が高く評価されることになる。これまでのところ、デイの中で同じ地区同士の人がふれあえるように仕掛けるということは、行われていないようだ。

(7)デイに来ない日の豊かな生活づくりを支援

大抵の利用者は、デイに来るのは週に1回か2回だろう。それ以外の日は地域にいる。そこで何をしているのか。本人たちに聞いたら、「家でくっちゃ寝、くっちゃ寝」だと。要するに、デイに来ている間は、職員がリードする通りに過ごせばいい。ところが家に戻ると、1日のすべてを自分で計画しなければならない。それは面倒だというのだ。そこで週に1回しかデイに来ないとすると、その日は残りの6日の生き方を計画する日にすべきかもしれない。それをデイの職員が支援するのだ。

(8)デイに来られない人への枠外デイサービス

いろいろな事情でデイへ行けない人のために、枠外でサービスをする。地域へ出かけて、簡単なリハビリのプログラムを提供するとか。または対象者1人ひとりについて、毎日どのようなメニューをこなしたらいいかを提案する。

(9)本人の癒しの対象を調べ、癒しの生活作りを支援

本人にとって、何が癒しになるのかを聴取し、癒しの生活づくりを組み立ててもらおう。今はどんな1日を過ごし、その中で何が癒しになっているかを聞き、癒しの対象が分かってきたら、それを自分の生活の周囲に配置するように指導する。

(10)利用者の共通の癒しの対象をメニューに加える

利用者に共通した癒しの対象を調べ、それをデイサービスセンターも取り入れる。子どもが癒しの対象なら、子どもとの交流をデイの事業の中に盛り込むのだ。

(11)デイを住民の高級事業にランクアップする

デイサービスというのは、その地域では単なる福祉事業ではなくて、地元の有力者なども来る所だというイメージを作り出す。そうすることで利用が増える。

島根県で2つの老人クラブを取材したことがある。一方はもうすぐ解散しようというクラブ、もう一つはむしろ最盛期にあるとみられるクラブ。何が違うのか調べたら、後者は町の議員や学校の教師たちが会を切り盛りしていた。もう一つのクラブは、そういう人はクラブに入っていなかった。

(12)デイを地域の中のハイクラスの社交場に

デイを要介護者のためのリハビリや入浴サービスをする所とするのでなく、それらもすることはするが、前面にはむしろ、地域のハイクラスの人たちの社交場なのだというイメージを作り出す。1日のどの時間でデイをやり、どの時間で社交場にするかを考えればいい。

(13)同じ地区の人同士で自主的な枠外デイ。それを支援

デイサービスセンターとは関係なく、地区で自主的なデイを住民の手でやってみる。それをデイサービスが支援する。別に「デイ」の要素があるかどうかにはこだわらない。その支援の中から、利用者が出てくるのではないか。

(14)デイの予備軍の人たちもその仲間に加える

いずれ要介護度が出てきたらデイを利用するようになる予備軍の人たちも、枠外

デイの中に加えていけばいい。

(15)利用者から人材を抜擢し、枠外デイなどで活躍してもらう

利用者をただ利用者の位置に置くだけでなく、その中から優秀な人を見つけて、地域で実施する枠外デイなどのリーダーシップを取ってもらう。デイサービスセンターでも、何らかの役割が果たせるのではないか。

(16)認知症の人には認知症のメンターを

セルフヘルプグループのように考えてもいい。認知症の利用者には同じ認知症の人たちが関わっていくようにする。

(17)本人が入りたいサロン等に協力を働きかけ

利用者が加わりたい地域のグループ、例えばサロンなどに、入れてもらえるように働きかける。そのサロンに仲間が入っていれば、その仲間を通して働きかけていくのもいい。

(18)カルチャー、公民館、スポーツジム等と提携

自分はデイサービスを受けるよりは、カルチャーセンターを利用したい、あるいはスポーツジムを利用したいという人のために、デイサービス側がそれらの機関と提携して、協力し合うのもいい。厚労省は、リハビリ目的でそれらの機関を利用したい人のために、医師と連携して、カルテをスポーツジム側に提供する取り組みもしている。

(19)利用後の変化を豊かさダイヤグラムで継続観察

あるデイサービスセンターで、利用後に本人がどのように変わってきたかを豊か

さダイヤグラムで比較してみた。人が豊かに生きるための要件として、①仕事・働く、②健康、③趣味、④家族、⑤ふれあい、⑥社会活動の6つの項目があり、これらを5段階で評価していくのだ。デイを利用することでどのような変化が起きているかがよくわかった。

(20)抑圧的な職員や利用者の力の行使をけん制

デイサービスの中では、まさか虐待のようなことは起きないだろうが、利用者から見れば抑圧的と受け取られる職員もいる。利用者の中にもそういう人物がいなくても限らない。そういう人たちが利用者に不安を与える態度を取らないように、周りからけん制していく必要がある。

1	本人発	本人の行動からデイらしきものを割り出し、応援利用者たちで自主的にメニュー開発、運営も
2	一人ひとり	個々の「卒業」への条件・努力目標を立ててもらおう 個々のライフデザインを作り、その実現を支援
3	フェアネス	メニューに豪華ゲストの招待も
4	スロー	利用者をご近所毎に分け、ふれあい助け合いを支援
5	日陰に光を	デイに來ない日の豊かな生活づくりを支援 デイに來られない人への枠外デイサービス
6	森羅万象	本人の癒しの対象を調べ、癒しの生活作りを支援 利用者の共通の癒しの対象をメニューに加える
7	ポジティブ	デイを住民の高級事業にランクアップさせる デイを地域の中のハイクラスの社交場に
8	全体を見る	同じ地区の人同士で自主的な枠外デイ。それを支援 デイの予備軍の人たちもその仲間に加える
9	アマチュア	利用者から人材を抜擢し、枠外デイなどで活躍を 認知症の人には認知症のメンターを
10	ひらく	本人が入りたいサロン等に協力を働きかけ カルチャー、公民館、スポーツジム等と提携
11	さかのぼる	利用後の変化を豊かさダイヤグラムで継続観察
12	権力の抑止	抑圧的な職員や利用者の力の行使をけん制 利用者と職員のチェックアンドバランスを構築

住民流福祉総合研究所

木原孝久

〒350-0451

埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷1 4 7 6 - 1

TEL049-294-8284

kiharas@msh.biglobe.ne.jp

<http://juminryu.web.fc2.com/>
